

原初的知覚と心理療法の勘所

小林隆児

はじめに

今年(二〇一三年)一月、学校法人西南学院は東京オフィスを開設し、初めての試みとして今回「臨床と哲学のあいだ」と題する公開講座を企画いたしました。企画した責任者として、今回の企画のねらいとその背景についてご説明申し上げ、問題提起に代えさせていただきます。と思います。

今回の企画のねらいについてはすでにご案内のちらしに次のように記載しました。「学問の知の危機が叫ばれて久しい。学問の世界の目指すべき研究対象が日常生活から大きく遊離してしまつたゆえの危機である。保育、教育、心理、医療、保健、福祉などの諸領域において、人と人が関わる中で営まれる臨床実践をいかに科学的に探求するか、多くの営みが行われている。その中で自然科学に倣つて実証研究が行われている一方で、量的研究に抗するようになつて質的研究の試行錯誤が続いている。そこで大切にるのは、自然科学とは異なる人間科学の領域における臨床と研究はどのように考えたらいいか、その思考の原理を獲得することである。」それを私が思いついた最大の動機は、一言で申しますと、人間を対象とする学問である人間科学に従事する研究者の

多くが、自然科学の研究方法を範としている現状に対して、果たしてそれでよいかという疑問でした。具体的に私の専門領域が例に取り上げますと、自閉症研究において、様々な障害仮説が次々に登場しては消えていくことを繰り返していますが、ここでは仮説を立て、データを集積し検証するという手続きを踏む量的研究がもつぱら行われています。自閉症の人々のこのありようそのものに肉薄する研究がほとんど生まれず、現状に対して、私はこれまで強い疑問と危機意識を持つてきました。

長年、私は精神科医として、児童精神医学を専門にしなが、教育、臨床、研究に従事してきました。その対象として自閉症を中心とする発達障害に強い関心を持ち続けてきました。私は自閉症の原因論として、多くの者が賛同してきた言語認知障害仮説や脳障害仮説には与せず、一貫して「関係」という視点から捉え、臨床研究を蓄積してきました。このような視点の重要性を特に強く意識するようになったのは、今から二〇年前(一九九三年)に報告した拙論「自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理」(精神科治療学、8(3)、305-313、1993)に遡ります。青年期自閉症者の治療を通して、自閉症の人々は外界刺激をど

のように知覚し体験しているのか、彼らの視点に立つて論じたものです。私が現象学的観点からとらえた最初の精神病理学的論考です。そこでの重要な鍵概念が「相貌的知覚」でした。これはおそろく皆さんにとっては聞きなれない用語だろうと思いますが、私にとって自閉症を「関係」から理解する上で常に重要な鍵概念のひとつとなつていました。

なぜ私がこのような独特な「知覚」に着目する必要性を感じたかといえますと、自閉症当事者の日常生活での体験のありようを理解しようとすれば、外界刺激を彼らがどのように知覚し、いかなる意味をもつ体験となつているのかを知ることがせひとも必要だと思つたからです。自閉症の人々が内的体験を言語化するときに大きな困難を抱えていることを考えると、彼らのこのありようを理解しようとすれば、言語化される以前の体験のありようを考える必要があると考え、「知覚」から迫ることを考えついでたわけです。

今日の精神医学の世界は勿論のこと、心理臨床の世界でも evidence-based の研究の流れが急速に強まり、「客観性」を担保するために、もっぱら行動科学的手法によつて臨床研究が遂行されつつあります。内的世界は「主観的」なものとして真正面から取り扱うことはほとんどなくなつてきました。その典型的な姿をアタッチメント研究にみるることができます。

なぜ私が独特な「知覚」をもとに、自閉症の人々のこのありようを迫ろうとしたのか、そのことについて述べてみたいと思ひます。

相貌的知覚と原初的知覚

先に述べた「相貌的知覚」は、私たちが日常的に用いる感覚である五感(視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚)とは異なつた独特な性質を持つ知覚状態で、生命を持たない対象においてもまるで生き物であるかのように感じ取るという特徴を持ちます。普段は単に物として認知しているように思えるにもかかわらず、時と場合によつてはそれが生々しく感じられ、多くの場合恐ろしい形相で迫ってきます。たとえば、ひとり夜道を歩いていた時、一本の紐が蛇のように思えて怖かつた経験をお持ちの方もおられるでしょう。ひとつの典型的な例といえましょう。

日常生活の中で私たちは通常刺激を、五感を通して知覚していると思つていますが、それは意識の世界での話であつて、意識しない次元において、あるいは特殊な状況に置かれた際には、この独特な知覚が前景に出て働きます。私たちの感覚、知覚世界は、外界刺激を分化した五感で感じ取るとともに、その底流に、通奏低音のように、未分化で独特な知覚が同時に機能しています。乳幼児早期の子どもではそれが前景に立ち、活発に働きます。しかし、成長とともにそれに代わつて五感が前景に出てくるようになります。人間が生まれてまもない段階、つまりは原初段階において活発に機能する知覚状態であることから「原初的知覚」とも称しています。昨年亡くなった精神分析学者で発達心理学者でもあるダニエル・スターンの理論の鍵概念である vitality affects(力動感)も同じような性質をもつ知覚状態で、「原初的知覚」の一

種といえるものです。

たとえば、視覚の世界においては同じ意味する文字であってもその形態(フォント)によって印象が大きく異なります。聴覚においても、同じ意味することは聞いた際に、語る者によって私たちのこころへの響き方は異なります。そのような印象の違いを決定づけているのが「原初的知覚」です。

五感による体験は「 \sim が見える」「 \sim が聞こえる」というように明確に「 \sim 」が表現することができる知覚体験で、誰もが「客観的に」捉えることができるという性質を持つていますが、「原初的知覚」による体験は、時々刻々と変化するその瞬間の変化そのものを捉えるという知覚体験です。「現実」という意味を表すことばに「リアリティ」と「アクチュアリティ」がありますが、まさにこの両者の違いは、五感と原初的知覚の違いをよく反映しています。

前者の「リアリティ」が事物的・対象的な現実で、既成の現実を意味するため、それは対象的な認識によって「客観的に」捉えることができますが、後者の「アクチュアリティ」は現時点で途絶えることなく進行している活動中の現実を意味し、それは活動に関与している当事者が自らの活動によってしか対処することができない性質のもです。「こころの動きとはまさに「アクチュアリティ」そのものであるとともに、それは言語化以前の体験といつていいでしょう。

分かりやすい例を挙げて説明してみよう。「とげとげしい」とば「がどのようなことばか、私たちはすぐに想像できます。」と「げ」が刺さった時の独特な痛み感覚と同じような感覚を引き起す(Mother Infant Unit:以下MIU)での臨床実践でした。

MIUではアタッチメント研究がよく知られている新奇場面法(Strange Situation Procedure:以下SSP)を用いて母子関係の特徴を明らかにしようと考えましたが、そこで私はアタッチメントという行動に特化した視点、つまりは行動科学的なものの見方に馴染めませんでした。アタッチメント研究は子どもが母親に接近するという行動次元に着目しますが、私の関心は母子関係において繰り返しられる「こころの動き」のありようそのものにあります。子どもは「こころの動き」、中でも特に「甘え」に焦点を当ててきたのですが、そこで重要な役割を果たしてくれたのが、先に取り上げた「原初的知覚」でした。

なお、この点については、今年、フリーライター佐藤幹夫氏を編者に、哲学者で本講座の指定討論者でもある西研氏、精神科医の滝川一廣氏、そして私の四名で『発達障害と感覚・知覚の世界』という本を日本評論社から上梓しました。その中で私はこの「原初的知覚」のことについて詳細に論じていますので、参照いただければと存じます。

関係からみた「甘え」のアンビヴァレンス

平成六年から平成二〇年までの一四年間に、私はMIUとSSP

「 \sim 」(ことば)を称して「とげとげしい」と表現します。痛み感覚には様々なものがありますが、「 \sim 」では「とげ」が刺さった時の「ちくちくとした」独特な痛みとして表現されます。それを可能にしているのは、私たちが知覚刺激の変化のありようを敏感に、アクチュアルに感知しているからで、「原初的知覚」の働きに依つています。

このように「原初的知覚」は、外界刺激の動きの変化を鋭敏に捉える性質をもっています。通常の五感を超えて、いかなる知覚刺激であってもそこに共通の動きの変化を感じ取っているわけです。そのおかげで、私たちは一見異なった感覚様相(モード)の知覚刺激と思われたものであっても、そこに共通したものを感じ取ることが可能になるわけです。隠喩(メタファ)ということばの表現を可能にしているのも同じような働きに依つています。

「 \sim 」で忘れてならないのは、この「原初的知覚」の最大の特徴として、私たちの「こころ」のありよう、つまりは情動の変化によって、知覚のありようも異なってくるということです。情動と知覚は分かたれないのです。不安が強い状態であれば、知覚刺激は恐ろしい形相を持って知覚されますし、安心した状態であれば、快適なものに映るのはそのためです。

原初的知覚と母子臨床

「相貌的知覚」に着目してからもまもなく、乳幼児期の母子関係に着目した自閉症の臨床研究に着手しました。そこで私は自閉症Pを用いた母子関係の観察と治療を蓄積してきましたが、もっと最近その全体像を一冊の書『関係から』みる乳幼児期の自閉症スペクトラム』(ミネルヴァ書房、2014)にまとめることができました。そこで明らかになったことの一部を述べてみたいと思います。

「 \sim 」で直接の対象となった乳幼児は一歳から五歳までの五五例です。SSPの対象年齢は一歳台なのですが、私は五歳まで試みています。私の関心はアタッチメントパターンの評価ではなく、母子関係そのものがどのように変化していくのかをみていくことにあったからです。その中でも今回はとくに二歳台までの生後三年間を中心に詳細に検討しました。そこでわかったことは、以下のような〇歳から一歳台において最も顕著になる子どもは母親に対する独特な関わりの様相でした。

「母親が直接関わろうとすると回避的になるが、いざ母親がいなくなると心細い反応を示す。しかし、母親と再会する段になると再び回避的反応を示す」

というものです。母子関係の難しさの中核にこのような子どもの関わりがあるため、両者の間でいつまでたっても好ましい関係の深まりが生まれず、逆に両者とも強いフラストレーションを体験することによって、その関係は負の循環を生むこととなります。このような母子関係の独特なありようを、私は「(母子)関係からみた『甘え』のアンビヴァレンス」(以下アンビヴァレンスと記す)と称していますが、そこで子どもたちは「甘えたくても甘えられない」心理状態を体験することになります。

「 \sim 」で重要だと思われたのは、通常孤立して心細くなれば、強

不安とともに悲しみや怒りが湧いてくるのですが、「アンビヴァレンス」の強い子どもたちはそれを直接母親に向けることができないという事です。本来ならば、そこで生まれた負の情動が抱っこされることによって快の情動へと変化し、心地よい体験となっていくのですが、彼らにそれを期待することはできません。甘えることができないゆえの当然の結果です。そのため、将来的に深刻な情動調整をめぐる問題を生むことになることが危惧されます。

乳幼児期の自閉症スペクトラムを関係から徹底解剖する

一歳台の彼らは「甘えたくても甘えられない」ため不安と緊張が高まっています。それは第三者の目にも比較的分かりやすい形で表現されていますが、二歳台の事例一六例を通覧した時、強烈に印象づけられたのが「アンビヴァレンス」の表現型が一気に多様化の様相を呈してくることでした。

「アンビヴァレンス」は子ども「甘え」体験に阻害的に作用するため、いつまでも心細さは解消されず、強い不安と緊張に晒されることとなります。それは子どもにとつて過酷な事態であるため、少しでもそれを軽減しようと様々なことを試みることとなります。二歳台の子どもたちにもみられる多様な反応はそうした不安や緊張の対処行動として捉えることができます。二歳台の一六例を検討するときのようながわかってきました。以下、具体的に列挙します。

①対人回避傾向が強まる中で、母親の存在が気になるにもかかわらず、近づくととはできず、ある一定の距離を取って徘徊し続

けます。これまで「落ち着きがない」「多動傾向」などとの行動特徴として指摘されてきた姿と重なります。

②あるひとつのことに没頭しようとする「こと」によって気を紛らわし、不安と緊張から逃れようとするもので、「これまで」「限局した興味への没頭」「ひとり遊び」などと称されてきた姿です。

③不安の強い状態にあつては、些細な変化でも彼らにさらなる強い不安を引き起こします。そのため周囲の環境を極力変化のない状態に保とうとします。それが「同一性保持 sameness」「強迫的こだわり」などと言われてきたものです。

④不安な時でも母親に依存することができない子どもたちは、結果的に何か困ったことがあつても「過度に自立的に振舞う」こととなります。

以上述べてきたものは、回避的傾向の強い子どもたちにもみられる対処行動ですが、以下はそれらとは異なり、なんとか母親との間で関係を持つようとする中で対処行動を示す子どもたちもいます。

⑤母親の注意や関心を引くために、ことさら相手に怒られるようなことをする子どもたちです。これまで「挑発的行動」といわれてきたものです。

⑥同じように注意や関心を引くために、自分の頭を壁に打ち付けるといった「自己刺激行動」を取る子どももいます。

これら二つの対処行動は、将来「自傷」「器物破壊」「他害」などの「行動障害」へと発展していくことが危惧されます。

ついで問題となるのは、母親との関係を維持するために、母親の

顔色をうかがいながら不安と緊張に対処しようとする試みです。

⑦「甘えたくても甘えられない」子どもがなおも母親との繋がりを求めようとする際に、最も穏便な解決方法は、相手の意向に沿って行動することです。相手の怒りを引き起こすことなく、相手も喜んで受け入れてくれるからです。その典型的な対処行動が「いい子になる」ことです。

⑧先の相手の意向に従うことと近縁の反応ですが、相手の意向が読み取りにくい場合、子どもはたじろぎ、どう対処すれば良いか困惑が強くなります。そこで相手の意向を常にうかがいながら相手に気に入られようと懸命に振る舞うようになります。「相手に取り入れる」、「媚びる」などと表現できるような言動です。それでも「甘え」が得られない時には、母親が見ている前で他人に甘えてみせ、母親に「当てつける」、「見せつける」のです。

⑨「いい子になる」ことが、自分なりの能動的な対処行動であるとするならば、次に問題となるのは、自分の欲求や意思を全面的に押し殺し、相手の思いに「過度に従順に振る舞う」ことです。その結果相手の思いに翻弄されることとなります。このような対処行動がいかに痛々しいものか誰でも想像できます。

⑩その他、これまで取り上げてきたような対処行動を取ることができず、ただ周囲の知覚刺激に圧倒されてなす術のない状態に置かれることもあります。これは精神病的反応で、極めて深刻な事態といわなければなりません。

以上取り上げてきた二歳台の子どもたちに見られる対処行動

の多くは、私たちがこれまで精神医療や心理臨床の現場において症状や障害として捉えてきた行動特徴に該当します。それは、これまで多くの臨床家が脳障害という基礎障害があるゆえの必然的な結果として捉え、一次障害と呼んできたものです。

今回の私の研究結果から、それを発達の観点から捉え直してみると、「甘えたくても甘えられない」ために生じる強い不安や緊張を彼らなりに和らげようとするもがきの対処行動だということがわかります。こうして自閉症に特徴的とされてきた病態の多くが「甘え」の観点から一元的に理解できるようになります。

ここで誤解のないように付け加えておきますが、最初はもがきとしての対処行動であったとしても、このような行動が恒常化していけば、人間関係は深まることなく、より一層深刻な事態になつていくことは明白です。結果的に脳機能になんらかの異常がもたらされても何ら不思議なことではないのだということになります。

「甘え」という日常語で考えることの大切さ

私は日頃教育の場で学生たちに、もし自分が子どもでも、母親に対して「甘えたくても甘えられない」状態に置かれたならば、どのように振舞うか尋ねるのですが、すると、多くの学生が次のようなことを答えてくれます。

「母親に甘えたいが、どうすればいいかわからないし、それに対し

—治療者（関係における双方の）の動きを感じ取ることであり、行動次元での観察や把握ではありません。このことを可能にしてくれるのは、相手と自分自身とが対峙した際に、自らの身体に立ち上る感覚です。それが私にとって鍵概念である「原始的知覚」なのです。臨床家として腕を磨くためには、この感度を高めることが大切ですが、そのためには自分自身にしっかりと向き合うことが求められます。自分を黒子にして「客観的」なスタンスで臨床研究に従事することは患者の「心」に迫ることはできないことを肝に銘じる必要があるのではないのでしょうか。

以上のことを改めて振り返った時、今回の企画でお招きした岡峻氏と竹田背嗣氏のお二人のご高見は、私に決定的な影響を与えてくれたものだといふことができます。以上で私の問題提起を終えたいと思います。

文献

- 小林隆児(二〇一三) 第3章 原始的知覚世界と関係発達の基礎 第4章 原始的知覚世界と関係発達臨床の実験 佐藤幹夫編著、西研、滝川一廣、小林隆児著、発達障害における感覚・知覚の世界、日本評論社、p. 113-172.
- 小林隆児(二〇一四) 「関係」からみる乳幼児期の自閉症スベクタラム、ミネルヴァ書房。

発達障害と感覚・知覚の世界

佐藤幹夫・人間と発達を考える会編

「発達障害とは何か」「精神現象とは何か」「人間関係や世界はどう体験されているのか」……。自閉症と呼ばれる子どもたち（人びと）の示す感覚世界の不思議さ、豊かさの謎に迫る。(帯より)

- 第一章 西研▼感覚・知覚とは何か—フッサール知覚論から
- 第二章 滝川一廣▼発達障害における感覚・知覚の世界
- 第三章 小林隆児▼原始的知覚世界と関係発達の基礎
- 第四章 小林隆児▼原始的知覚世界と関係発達の臨床
- 第五章 佐藤幹夫▼「かりいほ」の支援論

—「安心」の獲得と体験世界(感覚・知覚世界)の変容

日本評論社 定価 2400円+税

飢餓陣営39号

定価 二〇〇円+税

【特集】ハイリスク社会と対人援助

- I. 法に触れる人の援助▼山本藤司／滝川一廣／小林隆児
- II. 思想としてのケア論▼西研／愛甲修子
- III. 現場からの援助論▼水田恵／石川恒
- IV. ケアの本を読む▼浜田寿美男／内海新祐／山竹伸二／藤倉英世

【特集】東に本題震災の記憶と記録

- 村瀬孝▼原発と古事記
- 夏木智▼東日本大震災個人的体験記(3)
- 阿久津斎木▼物語で見た光景
- 青木みさき▼震災日記(2)

【特別】ロングインタビュー

橋爪大三郎マルクス購読(最終回)

- ▼『資本論』を手がかりに日本を読み解く
- 【監修】若松孝二追悼

宗近真一郎▼若松孝二を敬慕するためのエッセイ
高岡健▼若松映画についての断章

【吉本隆明と戦後思想】

浦上真二▼浜田馨／近藤洋太

◆お申し込み

郵便振替「00160-4-184978 飢餓陣営発行所」あて
予約費、2号分・200円 3号分・3000円 4号分・4000円
バックナンバー(注文の際は折り返しお送りします)。

「ハンディキャップ」と「ケア」を考える三部作

ハンディキャップ論

「本当に「障害」は個性なのだろうか。なぜハンディをもつ人の努力に「感動」するのだろうか。」(帯)

洋泉社・新書V 720円+税

「自閉症」の子どもたちと

考えてきたこと

「ハンディキャップを抱える当事者、家族・福祉・教育の現場の人、すべてに贈るエールの書」(帯)

洋泉社 1800円+税

人はなぜひとを「ケア」するのか

ひとはなぜケアする存在なのか。本書はその問いをぎりぎりまで掘り下げる。新たなケア論の誕生。(帯)

岩波書店 1900円+税